
グランと愉快的な仲間達

黒猫 訃桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グランと愉快的な仲間達

【Nコード】

N7476I

【作者名】

黒猫 訃桜

【あらすじ】

プリースト・・・それは神の加護を受けた者、人を癒し、悪魔を滅する力を持つ者・・・

これはそんなひとりのプリーストと仲間達の物語・・・

第1話：おい・・・とりあえずコイツをなんとかしろ・・・

プリースト・・・それは神の加護を受けた者、人を癒し、悪魔を滅する力を持つ者・・・

これはそんなひとりのプリーストと仲間達の物語・・・

ミッドガルド大陸のルーンミッドガッツ王国首都プロンテラ大勢の人で賑わうこの町にプリーストがひとり立っていた。

「あいつ・・・まだこないのか・・・」

名前はグランと言う。彼はプロンテラ協会に所属していて、協会から調査を頼まれているのだが、1人では困難なので知り合いのナイトに声をかけたのだ。

「おー悪い悪い遅れた〜」

全然悪びれもせず手を振りながらグランに近づいてくる男が来た。グランはやれやれといった感じで近づいていく。

「お前・・・今何時だと思ってる?」

「えと・・・約束が10時だから・・・10時30分位じゃないか?」

グランは手元の時計を見せる。長針と短針が両方とも12を刺している。

つまり2時間の遅刻である。

「……………怒っていいか？」

「だが断る」

ふざけるなよ！と言おうと思ったが今回はこちらから頼んだ事なので我慢した。この男こそグランの知り合いのイルルである。端から見ればどっからどうみてもイルルが悪いのだがこのふたりの仲ではこれ位日常茶飯事なのである。ノービスからの知り合いなのでもはや腐れ縁のような状態である。

「とりあえず……………飯食いに行こう！」

遅刻してきた癖にいきなり飯……………コイツ狙ってるんじゃないだろうな？と思いつながら時間も時間なので昼食を取る事にした。

「所で今日は何処に行くんだ？」

ガツガツと飯を食らいながらイルルが聞いてくる。

「ああ……………今日の巡回コースが俺の担当になっただけだ」

あ……………はいはい……………と言う顔で食べ続けるイルル
巡回コースとは、最近魔物が活性化してきたという情報が上がっているのでプロンテラ周辺を幾つかのコースに分けて定期的に巡回しているのである。

協会に所属していても基本的に束縛される事は無い。所属しているというだけで給料が貰えるので、半数以上のアコライトやプリース

トはその給料が目的である。だが一般的にナイトも転職をするとプロンテラ騎士団に所属するのが王道なのだがイルルはなぜか所属していない……

「さー食った食った……」

イルルは軽く3人前はあるうという料理を1人で全て平らげていた。
・・支払いはもちろんグラン持ちであった……

「んじゃ行くか？ポタだしてくれ」

「はいはい……」

ワープポータル……魔力で任意の場所を登録しその場所へ続く扉を出現させる魔法である。触媒にブルージェムストーン（青ジェム）というアイテムが必要だ。通称ポタである。俺たちはポタで移動しその地点から決められてルートを通してプロンテラに帰って来ると言うコースだった。

「そついえば最近なんかあったか？」

「おいおい……調査中にそんな話かよ……」

イルルは普段プロンテラにずっと居るわけではなくお金稼ぎや経験を積むための臨時広場に出向き色々な人と狩りに行っているのだった。半日で帰って来るともあれば中には3日位帰ってこないときもある。なので家は無く基本的に宿泊まりである。

「そつちで何か面白い話でもないかな」と思ってたさ」

「ん〜そうだな……ちよつと前に新人の人が入ったかな……」

「なるほどな・・・転職したてか？」

「ああ成績は結構優秀だったぞ彼女は・・・」

「ほお・・・女か・・・」

「おい・・・何考えてる・・・」

「ん・・・いやなんでもない」

嘘だ・・・イルルのこういう態度は決まってなにかある時だ・・・
プロンテラ騎士団も自分から辞退したのではなく騎士団側から追い
出されたと言う話も耳にした事があった。まあイルルの性格から考
えたら・・・あってもおかしくないかもしれないと俺は考えている。

「おーい、分ってるとは思うがそろそろ・・・」

「ああ・・・分ってる・・・」

イルルの言葉を合図に2人とも周囲の気配を探る。この巡回コース
で最も危険とされている場所に入ったのだ。今までの所は比較的危
険の少ない場所だったがこの先は肉食の魔物が数多く生息している。
・イルルがいるならそこまで心配は要らないが油断は禁物である。
むしろこの為に声をかけたというのにここで役に立って貰えないの
はそれはそれで意味が無い。

「どうだ？」

「何匹かこつちを見てるな・・・警戒してるってレベルだ」

「そうか・・・なら刺激しないように進めばいいな」

「所でこんな話知ってるか？最近この辺で見慣れない奴が居たって話・・・」

「知らないが・・・？」

「俺も臨時で聞いた話だ・・・この辺はウルフやビッグフットが主に生息してるんだが・・・ガシャガシャと言う金属音を聞いた奴が居たらしい」

「金属音・・・？ここは森の中だぞ？狩りに来た人じゃないのか？」

「だから噂だつて言ってるじゃないか・・・」

最近の魔物の活性化と何か関係があるんじゃないかと思いつながら俺たちは先に進んでいった・・・そして・・・その俺たちを見てニヤリと笑う影が居る事を俺たちは知らなかった・・・

第1話：おい・・・とりあえずコイツをなんとかしろ・・・（後書き）

どうも始めまして黒猫 訃桜です（・・・）

このたび趣味でやっているラグナロクオンラインのオリジナル小説
を書いてみちゃおうと思いかきました（*・・・）

誤字、脱字、言葉の使い方に間違いがあったりしたら教えていただ
けると幸いです。

第2話・家族とはかけがえの無いものである（前書き）

今回の巡回コースの中で一番危険な森の中腹で、グラン達を見ている何か・・・その正体とは・・・

第2話：家族とはかけがえの無いものである

森の中腹までやってきた所で俺達は異変に気がついた。

「誰かついて来てるな・・・」

「ああ・・・どうする？」

お互い目で確認しながら戦闘になった場合を考え、お互いをフォロ
ー出来る位置を保ち続けた。

そして頃合を見計らい・・・2人で同時に振り返った。

「誰だ・・・出て来い・・・」

イルルが威嚇する。すると正面の方からガシャガシャ音を立てなが
ら近づいてくる奴がいた。見た目は人と同じ、薄暗い森の中ではこ
の距離では人かどうか判断がつかない、耳を澄ませると・・・

「・・・た・・・けて・・・」

人の声が聞こえた・・・声の感じからして女性だ・・・

「女性みたいだ・・・」

「そうだな・・・危険な気配はしない・・・行こう」

イルルと声のするほうに向かうと・・・そこに女性が一人倒れて
いた。

「もしもし？プロンテラ協会の者ですが、大丈夫ですか？」

「あ……」

俺と目が合い意識があることは確認したが、どうやらかなり衰弱しているようだ。

「どうしました？」

「食べ物……なにか食べ物を……」

グランは食料を彼女に渡すと凄い勢いで食べ始めた。

「俺より凄い勢いなんじゃないか……？」

大食いのイルルですら感心する勢いで食べている彼女は、見たところクルセイダーである。一体どのような経緯でこのような状態に陥ってしまったのだろうか……幾ら森の中とはいえプロンテラまで一日もあれば着くはずだ。となるとここまで衰弱している事に疑問を感じた。ひとしきり食べ終わったのを確認して聞いてみることにした。

「私はグランと言います。プロンテラ協会に所属している者です。どうしてこのような所に？」

「あー……えーと……」

罰が悪そうに目を泳がせる彼女が何かを隠している事は明白である。

「イルル……今日の巡回はこの辺にして帰ろうか。報告しなければいけないこともできた」

「ん？そうだな……これだけ衰弱してる奴を連れて行ってもな……」

「!!!……ちょ!……ちょっと待って!!!何処に連れて行く気!?!」

急に彼女が取り乱した。どこかに連れて行かれるのに恐怖を感じているようだ。

「プロンテラ協会です。衰弱していた貴方を助けたと言う事を報告しなければいけませんので……それに今の貴方ではこの森を抜けられそうにない」

「う……」

「嫌なのですか?」

「こんな所で捕まってたまるもんですか!?!」

彼女が逃げ出そうとしたその時……

「おっと……流石に逃げてもらっても困るんでな……嫌な噂も

あるし」

イルルが腕を掴み強引に連れて来る。逃げ出そうと抵抗するが衰弱しているせいかまったく抵抗になってない。そして俺達はプロンテラ協会に巡回と女性を保護した事を報告した。

「お手柄ですよ！グランさん！！」

神父様が満面の笑みで俺達を迎えてくれた。

「よくユイナさんを保護してくれました！ティニシユ家の方から捜索願が出されていたのでよ・・・」

「ティニシユ家！？あの人が！？」

ティニシユ家というのはプロンテラでも有名な貴族で先祖代々クルセイダーの職に就き、偉大な功績を収めているという事で有名な家柄である。どうやら1週間ほど前から捜索願が出ていて、詳しいことは分らないが、行方不明であったようだ。おまけに目撃情報や保護者には懸賞金が掲載されており結構な金額が書かれていた。

「ティニシユ家・・・？」

イルルの頭には？マークが浮かんでいた。コイツはもう少し勉強をした方が良いと思う。

「とにかく本当にお手柄でしたね！グランさん！今回の報酬はいつもより多くしておきますね！」

俺達は偶然にも名家の貴族を保護してたようだ。しかし、どうして彼女がこんな行動に出たのかを知りたかった俺はイルルと一緒に彼女の元に行く事にした。

「お邪魔します」

部屋に入り顔を見た瞬間彼女は顔を真っ赤にして怒っていた。

「なんてことをしてくれましたか！？私を捕まえてた拳闘協会に引き渡すなど！！」

保護して助けた筈なのだがなぜか彼女の中では俺達は悪者扱いになっていた。

「おいおい・・・助けてやったのにそれは無いんじゃないか・・・？」

イルルも「えー・・・」と言う顔である。

「余計なお世話よ！私のこと何も知らないクセに！勝手に助けて勝手に連れて行っただから！そんなの誘拐と同じだわ！！」

「ユイナ」ティニシユ。有名なティニシユ家の双子姉妹の妹さんだね？家族の方から搜索願が出ていましたよ？なんでこんな事になったのか聞きたいのですが？」

「家出・・・」

彼女は確かにそう言った。家出と・・・そしてその後大声で叫んだのだ。

「だって！！みんな誰も私の事を認めてくれない！みんな姉様ばかりみる！！私だってがんばってるのに！！！！姉様だけ！姉様だけ・・・！！！！」

落ち着かせて聞いてみると、ユイナはティニシユ家の中では落ちこぼれと言われているらしい。剣術、魔力、精神力、どれもが姉の方が優れており、いつも姉と比較されては見習えと言われ続けた結果、耐えられなくなり家出を決意したのだと言う。

「お母様もお父様も私に厳しく姉様には優しい・・・姉様の方が優れているからティニシユ家に相応しいから・・・」

ユイナは涙を浮かべていた、励まそうと声をかけようとした瞬間・・・
「お前本当にそんな理由で家出したのか・・・？」

静かだが、怒りの感情を持ってイルルが彼女に声をかけていた。

「なによ！！貴方には分らないでしょうね！貴族がどういうものか！貴族とは常に品格と実力を求められる！普通の人とは違う！憧れ

の眼差しで皆から尊敬される！！そういう存在なのよ！？私もそれを理解している！だからお父様とお母様が私に厳しく当たる！！だって私は落ちこぼれだから！ティニシユ家にとっていらぬ子なのだ・・・」

パン！！

と言う音が盛大に鳴り響いた。当然やったのはイルルである。幾らティニシユ家を知らないとはいえ貴族に手を上げたのである。現在この場には俺とイルルのユイナしか居ないが、他の人が見ていたら間違いなく通報されイルルは何かしらの処罰を受ける事になっていただろう。貴族とは王に功績を認められた家系しか名乗れない、その貴族であるティニシユ家の双子の妹にビンタをしたイルルに俺は少し顔が青くなつた・・・

「っ！？あなた・・・私をぶつたわね！？」

「貴族・・・？おちこぼれ・・・？それが何だよ・・・そんなのが何なんだよ！！」

「っ！？」

イルルの気迫に押されユイナが黙る。

「何を理解しているんだ！！本当に理解をしているのなら家出なんて絶対にしない！どれだけの人に迷惑をかけたと思ってるんだ！！」

「そ・・・そんなの知らないわよ！！」

「努力しているといったな？じゃあお前の姉さんは努力していると

言った事はあるのか？その言葉を聞いたことはあるのか！？」

「・・・無い・・・けど・・・」

「本当に努力をしている奴は努力していますなんて言わないんだよ！お前は努力を言葉を自分の都合のいいように使って逃げてるだけだ！それはお前自身が一番分っているはずだ！！！」

「あ・・・う・・・」

ユイナの顔が悲しみを帯びていく、目尻には涙も浮かんでいる。

「そもそもなあ！搜索願が出てる時点でお前は家族にとって必要だつてことがなぜ分らない！！」

「え・・・？今なんて・・・？」

ユイナが信じられない事を聞いたと言う顔をした。

「私の・・・搜索願・・・？」

「ああ！！懸賞金までかけてな！！お前これ以上家族をしんば・・・」

「ガン！！！！」

「ほーらほら・・・もうその位にしておけ・・・幾らなんでも熱くなりすぎだぞ？」

イルルの後頭部に聖書の角がクリティカルヒット！イルルはその場

で沈んだ・・・

「ちなみに・・・今あいつが言った事は全部本当だよ？君の搜索願に多額の懸賞金・・・これだけの金額を出していると言ふ事は、家族の方はものすごく心配をしている何よりの証拠だよ？」

ちょうどその時、ガタン！と大きな音を立てながら扉を開け、ユイナにそっくりな女性が息を切らせながら入ってきた。

「ユイナ！！」

「姉様！？」

ユイナの姉は涙を流しながらユイナを抱きしめた。

「どうして・・・？どうして家出なんてしたの？私がかいけない事してしまった？それともお父様とお母様の言葉に耐えられなくなってしまったの？心配したのよ・・・？」

「姉様あ・・・」

ユイナも涙を流しながら姉を抱きしめている、どうやらこれにて一件落着のようだ。ユイナは姉と一緒に帰っていった。ユイナに掛かっていた懸賞金は父親がティニシユ家の家宝を担保に借り入れたお金だったそうだ。その日の夜、姉の発案により家族会議を開き、ユイナについて話し合いをしたそうだ。厳しくても行方不明になった娘の為に家宝すら投げ出す事の出来る愛情のある両親ならきつといい結果になるだろう。

「家族つていいもんだな・・・イルル」

報酬を貰った俺達は夜の町を歩いていった。

「ああ・・・家族つてかけがえの無いものだよな・・・愛してくれる家族が居るのに家出なんてするもんじゃねえよ・・・」

「そうだな・・・俺もちよつと故郷に帰って親に顔見せに行こうかな・・・お前もどうだ？」

「・・・・・・・・・・」

「ん・・・？イルル？」

「俺さ・・・家族居ないんだわ・・・」

「そうか・・・悪かったな・・・（だからコイツあんなに熱くなつたのか・・・）」

「いや・・・そんな気にすんなよ・・・んじゃまた何かあつたら呼んでくれ」

そんなちよつと寂しそうなあいつの背中を見ていたら・・・俺はいつの間にかあいつの肩を叩いていた

「なあ飲みに行こうぜ？今日はポーナスもでんだし・・・パーっ

とぞ
「とぞ」

そうして俺達は肩を組みながら朝まで飲み明かしたのだった。

第2話：家族とはかけがえの無いものである（後書き）

こんにちは黒猫 訃桜です。

森でガシャガシャしていたのはこの人だったんですね（・・）

それではまだ続きますので、読んでくださっている人は次回も楽しみにしててください。

感想や意見、日本語の使い方間違っているところがある場合は教えてもらえると助かります（*・・）

第3話・先輩は両手に花（前書き）

テイニシユ家の事件から約1週間何事も無いように見えたグランに
また新たなハッピーが！？

第3話：先輩は両手に花

ティニシユ家の事件から、1週間ほど経った頃、イルルが協会にやってきました。

「よう、グラン久しぶりだな」

「ああ、相変わらず暇してるのか？」

何時ものようなやり取りをしていると、

「失礼します・・・グランさん、ちょっとよろしいですか？」

と女性に声をかけられた。

彼女の名前はシルビア・ルーチエ、プリースト転職試験で優秀な成績を収め、先日プロンテラ協会に配属された新人さんだ。金髪のセミロングに透き通る様な蒼い目をしている。

「ああ・・・シルビアさん、どうかしましたか？」

「はい、神父様からグランさんと呼んでくるように言われましたので・・・そちらの方は？」

とイルルの方を見た。先日来たばかりの彼女には、協会の中ではそれなりに位の高い俺と話しているイルルの事が気になったのかもしれない。

「ああ・・・この人は、私の友人でイルルと言うんだ」

紹介すると同時にイルルが笑い出した。

「おいおい・・・そんな他人行儀で紹介しなくてもいいじゃないかよ」

「うるさいな・・・この人は新人だから緊張してるんだよ・・・」

「あゝこの人かぁ・・・前に言ってた優秀な新人さん」

シルビアは優秀と言う言葉にちよつと顔を赤らめた、恥ずかしかったようだ。

「そつだよ、シルビア＝ルーチエさんだ」

「シルビアと言います。まだプロンテラ協会に配属されてから日が短いですが、よろしくお願いします」

「俺はイルル、臨時広場の常連さ、よろしくな」

お互いの紹介が終わった後、俺は立ち上がり神父様の所に向かった。
・・そこでグランを待ち受けていたのは新たな試練にも似た内容であった。

「新しい新人が来たのですが、貴方に面倒を見てもらうことになりました」

「・・・はい？」

俺はシルビアさんの教育担当を既にしている。2人同時に教育担当になる事はあまりない、だが教育は誰かがしなければならぬが、そこまで人材不足になっているとは思っていない、一体どういふことなのだろうか？

「始めまして！リヴェンティって言います！グランさんこれからよろしく願います！」

引き込まれそうな紅色の瞳、白銀の髪を腰まで伸ばした女性が俺の前で元気に頭を下げた。

「よ・・・よろしく」

容姿に似合わず活発な態度に驚きながら、神父様に既に1人教育している新人が居る事を伝えた。

「しかし、私は既にシルビアさんの教育担当になっているのですが・・・二人目と言う事でよろしいですか？」

と問いかけた所、最近森で不可思議な事が多々起っており、その調査の為に人プロンテラ騎士団と協力し巡回の人数と頻度を増やしたのだと言う。

「彼女はまだ戦闘経験が少ないので、フォローの出来るベテランの人で無いと務まりません、貴方なら適任だと思いました。しかし、2人の新人を抱えて居ては流石に仕事に支障が出てきてしまう場合があると思います、ですので特別休暇を与えますので、教育方法は貴方に任せます」

と言う事で新人2人を抱える事になってしまった。通常新人教育は3ヶ月で終わる。しかし、2人を同時に教育するという例が余り無いため、倍の6ヶ月の特別休暇を貰ったのだが・・・

「これってさ・・・所謂左遷と言うやつなのか・・・？」

「そんなこと無いだろ・・・両手に花の状態で帰ってきて・・・何様？」

「俺様、と冗談言ってる場合じゃないんだけどな・・・」

「新人2人の教育係なんだろう？おまけに美人揃いじゃないか・・・2人の新人、特別休暇、これってフラグじゃないか？」

「お前が言いたい事は良く分るが・・・実際大変なんだぞ？」

と合流したイルルの喋っていると2人がこっちにやってきた。

「お待たせしました。グランさんこれからよろしくお願いします」

と頭を下げるシルビアさんそれに続いてリヴェンティもお辞儀をした。

「リヴェンティです！よろしくお願いします！」

リヴェンティは、明るく素直ではあるのだが、戦闘経験があまり無いとの事、孤児院で育つたらしく、冒険者アカデミーから入学の誘いがあった際、飛び込んで行き、適正審査を行った所アコライトに向いてることからプリーストの道を目指して、勉強や訓練をしてきたそうだ。なので試験的な戦闘訓練は行ってきたが実戦経験はあまり無いためこういう方法を取ったそうだ。要約すればこの2人に実戦経験を積ませて欲しいと言う事だった。

「と説明するとこんな感じだな・・・」

「なるほどな・・・それで特別休暇か」

イルルも説明をしたら納得してくれたようだ。

「んじゃーがんばれよ、両手に花のグランさん」

一言余計な言葉がついているがこの際我慢しよう、奴を利用すればこの教育はかなり捗るのだから・・・

「ところでイルル……」

「ん？最初に何処に行くかって？俺はどこでもいいが2人の戦闘経験次第だろう……」

「あれ？手伝ってくれるのか？」

「何言ってるんだ……その為に俺を待たせておいたんじゃないのか？」

今からそれを頼もうかと思って居たのだが、本人はやる気のようにある。なんとというかこいつらしいなと思った。

「それじゃあ……何処に？」

「アビスに行くか！」

3人「……」

グランは呆れた顔をして、シルビアは顔が真っ青になり、リヴェンティは目が点になっていた。アビスと言うのはアビスレイクというダンジョンで、獰猛で凶暴な竜族が住んでいる洞窟である。なにか目的が無い場合、腕の立つ冒険者でもあまり近づこうとはしない場所だ。

「おいおいイルル、幾らなんでもアビスはお前でも厳しいだろ……」

「いやーそんなこと無いぞ？ちよっと前にペアで行ってきたし」

「ペアって・・・お前なあ・・・」

あまり人が寄り付かない分、レアアイテムが出れば高く売れるらしい、収集品もあまり見かけないので高値で売れるそう。金銭的にも経験的にも良いらしいのだが、幾らなんでも新人2人を連れて行くような場所ではない。

「いや・・・イルル別の所にしてくれ、流石に厳しすぎる」

「まあそうだろうな・・・とりあえずお互いの経歴から教えてもらおうか」

やっと真面目になったようだと言っていたら・・・

「立ち話もなんだから飯を食いながらにしよう！きっとグラン先輩が奢ってくれるはずだ！」

「っちよ！おまっ！」

気がついたときにはイルルは既に2人と一緒に飯屋の方向に歩き出していた・・・

第3話：先輩は両手に花（後書き）

お久しぶりです。 本当に久しぶりすぎます（；・・・）

ちよつと忙しかったのもあり、超更新が遅れました（；・・・）
楽しみにされている方（きつと居ない）には大変申し訳なかったで
す。

新キャラが2人ほど登場しました。グランには両手の花です！
これで何か期待しない方がおかしい！さて皆さん色々期待してくだ
さい。ではまた次回お会いしましょう。
誤字脱字日本語の間違い等あると思いますが、温かい心で見つてやっ
てください。

第4話：乙女の過去と大食い男（前書き）

今回はまず冒険者と職業についての説明を最初にさせていただきま
す。簡素ではありますが、こんな感じです。

第4話：乙女の過去と大食い男

冒険者になる為の道のりは人それぞれだ、俺はもつと広い世界を見てみたい、触れてみたい、はつきり言えば好奇心から冒険者になった。今はプロンテラ協会に所属しているが、それまでは臨時広場や1人で活動している事もあった。イルルと知り合ったのも臨時がきっかけだった。

両親が冒険者の家系の場合は、その子供も冒険者として期待され、各職業の専門的な学校に通う事が出来るが、両親が冒険者の家系では無い場合、冒険者アカデミーと言う冒険者育成機関に通い卒業すると、晴れて冒険者と名乗る事が出来るようになり、1次職になる事が出来る。

1次職は基本職が6職、特殊職が4種類、そして1次職から更に経験を積み、試験を受け合格する事により、2次職の道が開ける。1次基本職からなれる2次職は12種類、特殊1次職は基本的には2次職は存在しないが、テコンキッドと呼ばれる職業のみ2種類の2次職が用意されている。

そして学校通いとアカデミー卒業生との一番の違いが1次職の経験にある。学校通いの場合2次職まで勉強する事が出来る。更にその職業に特化したカリキュラムが受けれるため、自分の目指した職業を深く知ることが出来る。

アカデミー卒業生の場合は、アカデミーへ来る依頼を引き受けて経

験を積む事が出来るが、アカデミーから外に出て、本当の冒険者として旅立つ事も出来る。アカデミー卒業生同士で助け合いながら経験を積む者もいれば、1人で旅立ち臨時広場や1人で経験を積む者もいる。1次職になった時点で立派な冒険者と世間では認められる。

飯屋に入った俺たちは、彼女達の経歴について教えてもらった。

「では、まず私から」

シルビアさんが先に話してくれた。

「私はアルデバランで生まれ育ちました。両親も冒険者でしたので、学校に通い、色々な人を癒しているプリーストの姿に憧れてプリーストになる事を決意しました。基本的な戦闘訓練は受けて来ましたが、実戦経験は2回ほどしかありません。それも、お手伝いの様な感じでした。行った場所はアコライトの時ゲフェンダンジョンを1回とフェイヨンダンジョンを1回です。その後は学校の訓練しか受けていません」

「なるほど・・・学校を通じてプリーストになったと・・・」

「はい、そうです。グランさんはどうして冒険者に？」

「俺はアカデミーから冒険者になりました。世界を見てみたいと言
う好奇心がきっかけでした」

「じゃあ次は私ですね！」

今度はリヴェンティさん経歴を聞くことになった。

「私は、小さい頃に両親に捨てられてしまったので、ずっと孤児院
で過ごしていました。孤児院の中は、似たような子が多くて、私は
ずっと外に出たいと思っていました。このまま孤児院から出られな
いかもしいれないと思ったからです。なのでアカデミーの人が来た時
この人について行けば外に出られる！と思って冒険者の道に進みま
した。1次職になってからはずっと依頼を受け続けていました。ア
カデミーの入学金とか、一切持っていないかったので、早く返さなき
やと思つて・・・なので訓練はしてたけど、実践はまだ一度も・・・
こんな所です」

「そうですね・・・そんな辛い過去があつたのですね・・・」

気がつくと、目尻に涙を浮かべながらシルビアがリヴェンティの手
を取っていた。

「え！？・・・あの・・・泣かないで下さい！今は皆さんと会えて
本当に嬉しいですから！」

リヴェンティさんは慌ててシルビアさんを宥めていた。

「んーある程度分つたが・・・イルルどう思う？」

これから実戦経験を積んでもらう2人のプリーストを見て俺は頭を傾げた。

「んー・・・難しい所だが1、安全策を取る。2、ちょっと危険だが賭けに出る、の二つかな？1の場合はこの付近でウルフヤビツクフット辺りを倒しに行けばいい、話を聞いた感じだと、この程度でも充分実戦経験が積めると思う、2の場合は蟻地獄ダンジョンへ行く、目的はマヤーとマヤーパールの討伐だ。1と比べると遥かに難易度が上がるし、2人にも危険が及ぶ場合がある、そんな所だろう。まあどちらにしるどちらもいずれは通る道だ」

こういう時のイルルはとことん現実的である。確かにイルルの言う通り、最終的には通らなければいけない道だ。だが今それを選択した所で、彼女達が耐え切れるだろうか？そこが問題である。

「お前の時はどうだったんだ？」

「ん？俺の時か？・・・2だ・・・」

「そっか・・・」

素直に尊敬した。どんな状況だったかは知らないが、俺が冒険者になりたての頃なら、とてもじゃないが2を選択できなかっただろう、

ひよっとしたら選択の余地が無かったかもしれない・・・

「お待たせしました、サベージベベのステーキで御座います」

「ひゃっほう！待ってましたあ！」

運ばれてくると同時にガツガツと料理に食らいつくイルルの姿を見て、なんだかなあ・・・とグランは思うのだった。

そして、食事が終わり、狩りに出かける事になった。

「おい・・・イルル・・・」

「ん？どうした？グラン」

グランの後ろから怒りのオーラが立ち込めている。さっきの食事の件だろう。

「どんだけ食べれば気が済むんだよ！？全体の2/3も食ったんだぞ！？・・・今日は払え・・・絶対払え！！」

2人の経歴を教えてもらい、狩場を決めている間に、イルルはずつと追加注文をしていたのだった。そんなグランに対し「あゝ悪かった」「ごめんごめん」と受け流しているイルルの姿を見ながら、シルビアとリヴェンティは話し合っていた。

「グランさんって怒ると怖い人なんですネ・・・」

「んゝシルビアちゃんそれは違うと思うなあゝそれよりイルルさんの食べる量のほうが凄いと思う・・・」

「え・・・どうしてです？あんなに怒ってるグランさんを見るの初めてですよ？」

「私の勘なんだけど・・・あれが本当のグランさんなんじゃないかな？」

「本当の・・・グランさん？」

「うん。協会って言っても、上下関係や周りから色々見られてるからね、グランさんは協会でも幹部に近いから、協会の仕事をしている最中にあんな態度じゃ信頼無くなっちゃうでしょ？」

「確かに・・・ちよつと失望してしまうかもしれません」

「でも、イルルさんは協会とか一切関係ない友人でしょ？だから、本音をぶつけられるんじゃないかな？」

「成る程・・・お互いを信頼しているから気が置けないという事ですか・・・」

「そうだよ・・・見てて羨ましくなるよ・・・後、私達も友人だよ？そんな他人行儀じゃなくてもいいんだよ？」

「そ・・・そうですね！では・・・よろしくね、リヴェンティさん」

「うん！よろしくね！シルビアちゃん！一緒に立派なプリーストになるっ！」

「はい！お互いががんばりましょう」

こうして、リヴェンティとシルビアは仲良くなっていった。

第4話：乙女の過去と大食い男（後書き）

なんかイメージが沸いたので書いてしまった。後悔はしてない。

さて、これからシルビアとリヴェンティの実践訓練のスタートです。

狩場は1と2どっちになったのでしょうか？

気になる人は更新を楽しみにしてください！

第5話：ある日、森の中、禿に出会った（前書き）

ハイパーお久しぶりです。もう1年以上更新してないです。まあ今回も何処まで続くか分かりませんが、興味があればどうか読んでいってください。因みに筆者は3次職実装と共にほぼ引退と言う形になっているため、3次職の登場はほぼ無い、もしくは勉強して載せるといいう形になると思います。それではどうぞ。

第5話：ある日、森の中、禿に出会った

4人は森の中を歩いてきた。今回はフェイヨンの森で自分の宿賃を自分で稼ぐと言う、冒険者にとって基本中の基本をしてもらったことになった。構成は俺とシルビア、イルルとリヴェンティの2組となった。

「じゃあ、イルルはリヴェンティさんを頼むよ。やり方は任せる」

「あいよ、むしろそっちは大丈夫か？支援プリ2人だろうか？」

「ああ、ホーリライトがあるから大丈夫、それに此処じゃ万が一も無いだろう…」

ホーリライトとは、プリーストの数少ない聖属性の攻撃魔法の一つだ。威力自体はそこそこだが、このあたりの魔物を相手にする程度は問題はない。それにグランが居るのならこの辺りは如何にでもなる。

「じゃありヴェンティ、俺たちはこっちの方へ行こうか」

「はい！ちょっとドキドキしちゃいますね！」

リヴェンティとイルルは一足先に向かったようだ。さて、俺たちも行くとしてよう。

「シルビアさん、行きましょう」

「は、はい！よろしく願いします…」

緊張しているのだろうか、シルビアは顔を赤らめながらペコリと頭を下げていた。緊張しても仕方が無いが、この緊張が仇にならなければ良いが…と思う格蘭であった。

「ハイそこ、もう一匹ウルフが来てるよ！キリエが掛かっているからといって油断しないでね！」

「はい！…ホーリーライト！」

キリエエレイソン、神の加護を盾として対象を守る、ある程度経験を積んだプリーストが使う防御魔法である。物理攻撃力と物理防御力が低いプリーストは基本的にキリエを使い、自分を守りながら攻撃をする。今やっているのはその基本的な流れだ。少ないが実戦経験があるシルビアは最初のような緊張は無くスムーズに進んでいた。そして、そろそろ目標に到達する頃にそれは起きた。

「シルビアさん！！下がって！！」

「え？…あっ！！」

何者かによつて、シルビアは背中を切られその場に倒れた。2人もこの場所は安全だと思ひ油断をしていたが、グランは長年の経験と勘で危険を察知したが、経験の少ないシルビアはその危険を察知出来なかつた。急いでイルルに個別通信を送る。

（緊急事態だ！シルビアさんが切られた！こっちに来てくれ！）

（分かつた、少し待ってる）

短く通信を終えると、グランは相手を見た。倒れたシルビアにはもう興味が無いようで、こちらを見ている。それは『彷徨う者』であつた。

彷徨う者とは、昔冒険者だつた者が何らかの理由で魔物と化し人を襲うようになった魔物の総称である。

「なんでこんな所にこいつが…魔物の活性化と関係があるのだろうか…」

グラン1人では対処が出来ない為、何とか時間を稼いでイルルが来るまで耐えなければならぬ、尚且つ倒れているシルビアも見た限り致命傷か運が良くても重症だ。早めに治療を始めないと命に関する可能性がある。グランは彷徨う者を距離を開けながらもシルビアの傍に移動をし、キリエを保ちながらヒールをを掛けようとするが、彷徨う者の鋭い攻撃にキリエを保つ事に精一杯でシルビアの方に手が回らなくなつていた。魔力も切れ掛かつてきている。魔力回復の青ポーシオンも持つてきてはいるが、今使つてしまつては、シルビアを回復する魔力が無くなつてしまふ。そう考えていた時、

ドンー!!

彷徨う者が吹っ飛ばされていた。その隣でイルルがグランを守るように彷徨う者と対峙をしていた。グランは急いでシルビアの回復を始めると、そこに、追いついて顔を真つ青にしたリヴェンティが立っていた。

「リヴェンティさんも早く手伝って！危険な状態なんだ！！」

「あ…は…はい！す、直ぐお手伝いします！」

リヴェンティも集中してヒールを唱えようとするが、初めて見る惨状に上手く集中が出来なかった。普段なら全く問題なく使える支援や回復の魔法が使えない。早くしないと出来たばかりの友人が死んでしまうかもしれないと言うのに、動機が激しくなり、頭がクラクラする。圧倒的な恐怖、これが実戦、最悪の事態を想像し手が震え、何をしても良いか全く分からなくなった。

「訓練を思い出すんだ！何度もやってきただろう！」

グランに叱咤される。そこで漸く自分がすべき事を思い出す。そして友達を助けるために再度集中をする。今度は上手く集中する事が出来た。癒しの光が強くなる。これならきつと助かる！リヴェンティの中に希望の光が見えた。

「さて…なんでこんな所にお前みたいなのがいるんだらうなあ…」

イルルは彷徨う者と対峙しながらもこの森に不似合いが奴が居る事を不思議に思っていた。シルビアは治療が始まったのでもう大丈夫だらう、なら自分はコイツを片付けてしまえば良い。考えるのはそれからにしよう。

「ほう…村正か…良い物持ってるじゃないか…」

妖刀村正、その昔、人と人が争っている際に、余りにも人を切りすぎ、切られた人の恨みが宿り呪われた刀、武器関係の書物で読んだ事はあつたが実物を見るのはイルルも初めてである。

「だが…コイツは少し厄介なんだよな…」

彷徨う者の身なりは人間に近いが、とにかく動きが素早い、熟練の冒険者であつても、物理的な攻撃を当てる事は難しい、イルルであってもそう簡単には攻撃を当てる事は出来ないのであつた。彷徨う者からの攻撃を避けたり、盾で受け流す事は出来ても、此方の攻撃も当たらない、こうなってくるとスタミナの勝負であるが、鎧を着込んでいるイルルと軽装の彷徨う者ではどっちが先に無くなるかは目に見えていた。

「よつと…!…」

槍を大振りに振り彷徨う者と距離を開ける。すかさずイルルは自分の持ち物の中からあるものを取り出し、さまよう者にソレを向けて叫んだ。

「フロストダイバー！」

イルルの持っているアイテムから冷氣発生し彷徨う者に向かって飛んでいく、彷徨う者は避けようとしたが、避けるよりも早く冷氣が当たり、彷徨う者は氷漬けになった。イルルの使ったものは相手を凍らせるフロストダイバーの魔法が封印されたスクロール（巻物）であった。

「これで、終わりだ」

スピアブーメラン、渾身の力を込めて敵に槍をに投げつける、ナイトのスキルの一つだ。氷漬けだった彷徨う者はスピアブーメランを喰らい、消滅した。妖刀村正と手帳のような物を残して…

「いや、全く大変だったなあグラン」

彷徨う者を倒した所で実戦は終了フエイヨンで宿を取り、酒場で食事を取っていた。シルビアも治療が終わり、一緒に食事を食べていた。

「そういえばイルル、村正と一緒にあった手帳ってなんだったんだ？」

「あー、これ？古いカード帖だよ。開けるとランダムでカードが出る奴」

カードとはモンスターの力の結晶である。武器や防具にはこのカードを挿入するスロットと言うものが付いており、カードを挿す事によって武器や防具の性能を上げることが出来る。モンスターが消滅する際に極稀に落とすことがある。モンスターによって装備の適正箇所があるため、挿せる部分と効果はモンスターによって様々である。

「えー！！何それすっごいじゃないですか！！」

大声を上げたのはリヴェンティである。彼女は見たことない物や新しいことに対して興味津々で、見ているこっちとしては退屈はしないのだが、何処からこの元気が何処から生まれてくるのか知りたい。

「という事は、凄く高いんじゃないですか…？」

「そうだね、これ売れば3ヶ月くらいは宿代は心配しなくて良いかな？」

シルビアの質問にグランが答え、本人は目を丸くしていた。

「んで、この古いカード帖なんだけど、どうする？」

今回は訓練とは言え実戦である。実戦の場合は、全員のアイテムを集めて、お金に換えて均等配分する精算するのが一般的である。レアアイテムが出た場合は欲しい人による競売が行われることもある。

「んー今回は俺が頼んでるからなあ…必要経費と宿代以外はイルルで良いんじゃない？」

「私もそれで良いと思いますよ。とても貴重な経験をさせて貰いましたし…」

「そうだね、うちもそれで良いと思うよ？」

「……マジで言ってる？これ結構な金額になるぞ本当に」

妖刀村正と古いカード帖、中でも妖刀村正はプロンテラ騎士団にも数本しか置いてない逸品である。これを超える刀というと名刀正宗位な物だ、正宗自体は数年前にアマツで発見された一本以外現在確認されていない。噂ではアマツの奥深くにまだ存在するらしいが、そもそも屋深くに入る事自体が困難な為、噂の領域を出ない。

「じゃあ、お前が決めるよ、イルル俺たちはそれで構わない」

「ふむ…そうだな、村正は貰っておく、だがカード帖は売ろう、だが普通に売ったのではつまらない、この中の誰かに開けて貰い、出たカードを売りに出そう」

「おいおい、カード帖開けるなんて金持ちの道楽って言われる程だぞ？良いのか？」

「馬鹿だなあ…たまには上流階級のお遊びって物をやったって良いじゃないか、どうせ買ったわけじゃないんだし、それにやって見たいだろ？一度位」

こういう時のイルルは止めても止まらない、堅実な利益よりも、ギャンブル性のある事の方が好きなのだ。余裕がない場合なら売るだろうが、今は余裕がある。こういう盛り上がる余興が大好きなのである。

「という事で、はい開けたい人〜！」

「はい！うち開けたい！」

「……」

「えと…開けて見たいです…」

真っ先に手を上げるリヴェンティ、無言で手を上げるグラン、おどおどしながらも好奇心に負けて手を上げるシルビア、

「って結局全員開けたいのか…じゃあジャンケンな」

という事でジャンケンに勝ったシルビアがカード帖を開ける事になった。

「ああ〜あの時グーを出していればああああ…」

「これも神の導きだ…」

敗北したプリーストが何か言っているが、聞こえなかったことにしておこう。

「それでは、開けます！えい！」

別にそこまで気合を入れて開けなくても良いのだが、興奮しているのだろう、そして出てきたカードは…

「ソードガーディアンカード…って何ですか？」

「はい…？」

「え…？」

「…？…？」

イルルは開いた口が塞がらない、グランはコーヒーカップを床に落とす、リヴェンティは訳が分からない、

「OK…ちよつと落ち着こう、そしてそのカードを見せてくれ…」

イルルも口調がおかしい、ソードガーディアンとはトール火山に生息する鋼鉄の鎧を纏ったゴーレムである。全長およそ5m程の巨体にも関わらず、剣を高速で振り回す、その辺を徘徊しているボスよりよっぽど危険な魔物なのだ。カードの効果はある特定のスキルの威力を大幅に増加させる効果があるが、とても貴重な事には変わりはない。

「おい…グラン…本物だこれ…やべえぞ…」

「おいおい…結構な値段するじゃないか…こんな品物どう裁くんだけ？」

「んー…一応宛てがあるからそいつに頼んで見るわ…だが、この金額を4人で分けるのは良いとして、あの2人にこれだけの金額を渡して良い物が悩むんだが…」

「確かに…これだけの金額を冒険者になりたての2人に渡すのはまずいな…ある程度は渡すが、残りは必要に応じて俺から渡していくことにしよう」

今回カード帖から出たカードは実際4人で割っても成金になるのは十分な金額だった、冒険者の中にはこう言った運で成金になった冒険者が失敗する事が良くあるのだ。中には冒険者を辞める者も居るほどに、そういった事態にならない為にも、この2人にはそう簡単に大金を与えるわけにはいかないのだった。

「分かりました。そう言うことでしたらグランさんにお任せします」
「む、折角お金持ちになったと思ったのになあ」

リヴェンティは、少し不満が残ったようだが、グランとイルルの提案に賛成した。

「じゃあ、これは俺が知り合いに頼んで売ってきてもらうから、売れたら連絡するな」

「ああ、頼んだ」

「よろしくお願いします」

「お願いします！」

「よし！今日は色々あったけど、みんな良く頑張ってくれた、明日以降もこのような実戦と一緒に乗り越えて行こう！乾杯！」

「乾杯！！！！」

こうして、初めての实戦訓練は幕を閉じたのであった。

「あ、おねーさん！！ベベステーキ6枚追加で！！」

「てめえ！まだ食うのか！？」

そしてまたグランの財布が悲鳴を上げるのであった。

第5話：ある日、森の中、禿に出会った（後書き）

お久しぶりです。黒猫訃桜です。

この度また突然、更新することとなりました。

次回からはギャグも混ぜていこうかと思っています。

では、余り期待しないで待っていてください。

第6話・いかがわしいとはとんでもない！（前書き）

今回は、新キャラでます。中々プロットが良い感じに纏まりません。纏まった時点で書いて更新していこうかと思っています。

第6話…いかがわしいとはとんでもない！

いつものように協会の業務をしていた時だった。イルルが現れたのは…

「よう、グラン、ちょっとシルビアとリヴェンティと貸してくれ」

奴はいきなりこんなことを言ってきたのだ。

「はあ？いきなり来ておいてその要求はどうなんだよ、お前…」

相変わらずの傍若無人っぷりに半分ほど呆れている所に、シルビアとリヴェンティがやってきた。

「どうかしましたか？」

「どうしたの？」

2人とも名前だけ出てきたので何の用事だろうか？と思ったようだ。

「ああ、丁度よかった。暇だったら2人にちょっと付き合ってもらいたいんだ。何か飲み物でも奢るよ？」

「んーどうしましょう？」

「どございようね？」

お互いに顔を見合わせる2人、2人ともこれといった用事はなく、

グランを仕事を手伝っている最中であつた。

「いやー、ちよつと綺麗所が必要なんだよ…なあ？良いだろう？」

俺は思った、イルルが綺麗所を欲しがつた事は今まで無かつた。一体何を考えているのだろうか？俺はシルビアさんとリヴェンティさんの新人教育を任されている。最近を実戦も順調な為、最近は協会の業務を覚えてもらつている所だ。それも手伝い程度なので忙しいとは言えないが、この2人をイルルに任せて良いか？そうなつてくると話は別である。こいつは何か目的が分からない限りは安易に了解すると後で酷い事になる。絶対になる。寧ろ今まで酷くなかつた事が無い！！と真剣に考えていると…

「ねーシルビア、綺麗所つてどういう意味？」

「綺麗所と言うのは簡単に言うと美人つて事ですよ」

「へえ〜 じゃあ私達は美人だから誘われてるんだ」

「ま…まあ、そう言うことになりますね…」

少々頬を染めながらシルビアが肯定する。

「イルル…目的はなんだ…？俺はこの2人の新人教育の担当をしている。その監督責任上お前の目的を知らなければいけない、2人にいかがわしい事をさせられては困るからな」

「そんないかがわしい事なんてないつて…絶対…普通にお茶を飲み誘つてるだけじゃないか…？」

「お前って女の子誘ってお茶を飲みに行くタイプだっけ？」

「グラン…幾らなんでもそれは無いだろう…」

確かに、自分の今まで付き合ってきた印象だけで人を判断する事はよくないことだ。イルルにだって知られたくない事や、俺の知らない事だって色々あるだろう、だが、今回は目的をちゃんと知っておかないといけない気がした。

「なあ、本当にいかがわしい事じゃないんだな？本当にいかがわしい事じゃないと神に誓えるか？」

「ああ！神に誓っていかがわしい事じゃない！！」

俺達は神聖なる協会で何回いかがわしい、いかがわしいと連呼しなければいけないだろうか、なんだか悲しくなってきた。おお、神を私を許してください…だが、これではっきりと分かった事があるのです。

「お前、嘘付いてるだろ…？」

「はあ？神に誓っていかがわしい事じゃないって誓っただろう？」

「ああ…」

「そもそも、お前が神に誓ってる事自体が怪しいものだ！お前なら神より食い物を選びかねない！！」

端から見ているシルビアをリヴェンティは何時になっただら終わるのだろうか、と溜息をついていた。

「…いくらんでもそれは酷くないか？グランよ…本当にお茶してくるだけだって…マジで」

「ったく…お前が神に誓うなんて気持ち悪い事言い出すからこんな事になったんだぞ？」

「信じるものには救いをくれるのが神じゃなかったっけ…？」

「分かった分かった…救いをやろう、2人が良いなら、連れて行って良いぞ」

「おお！神様！仏様！グラン様！！やっぱり頼れるものは友人だ…」

何時も通りのイルルだから、多分問題にはならないだろうと思いい、仕方なく同行の許可を出した。

「んで、2人とも大丈夫？」

「大丈夫ですよ」

「うん、うちも」

「よし、じゃあブリリアントなティータイムと行きましょうか！」

同行を許可した事を半分ほど後悔しながら、俺は3人を見送った。

「やーやー待たせたね。りょーん」

「うっひょう！イルさん！まじで！？まじで！？連れて来てくれたの！？」

イルルが2人を連れてきた所は、プロンテラでもちよつとした人気のあるカフェだった。

「お前が連れてこないとカード売ってあげないもんね！なんて駄々こねるからしょうがなく連れて来たんだぞ？」

イルルと話しているのは服装からしてブラックスミス、武器関係の知識に長け、製造や販売、修理を生業としている上級職の一つだ。

「ああ、紹介が遅れたね、こいつはブラックスミスのりょーん、前のカード帖から出たカードを売ってくれる人だ」

「はじめまして！りょーんです！今後ともぜひお見知りおきを…」

顔を輝かせながらりょーんは2人を握手をした。この時2人は綺麗所が欲しいと言ったイルルの言葉を理解したのだった。

「あと今日は僕が出すので遠慮なくどうぞ!」

そしてメニューを見てそれぞれ注文をする。

「リンゴジュースをお願いします」

「うちは、ブドウジュースで!」

「トロピカルパフェとニンジンケーキをホールで」

「えっ…?イルさん!?ちょっと頼むもの違うんじゃない!?!」

「みんなで分ければ良いじゃん、半分は俺が貰うけど」

チラッとイルルが2人に目配せをする。シルビアは分からないようだったが、リヴェンティがフォローした。

「わぁ りょーんさんって優しいですね」

「え…あ…うん!みんなで食べると美味しいもんね!」

りょーんは笑顔だったがその目には少し光るものが見えた気がした。

「あ…あの!おふたりは、普段どのような事をしてるんですか?」

「私達はまだ新人なのでグランさんの下で、色々教えていただいています」

「なるほど…もし良かったら、今度一緒に狩りでも行きませんか?」

ちなみに僕はギルドも運営しているので、行きたい所があれば大体の所はいけると思えますよ」

ギルドとは簡単に説明をすると、仲の良い人達が一緒に集うコミュニティのような物である。イルルはギルドに入っていないので臨時に赴く必要があるが、ギルドに入れば色々な職業の人がいるので臨時に行く手間が省けると、連携やチームワークが取りやすいというメリットもある。

「ギルドマスターさんでしたか：もし機会があれば是非お願いします」

「でも、ギルドマスターって結構モテる印象あるよね？」

その言葉にりょんが固まった。リヴェンティが地雷を踏んだのだ。そう、ギルドマスターと言うのは、一種の憧れや尊敬される存在、普通に見ると凄くモテる位置に居るのだが、りょんはなぜかモテない、だが決してモテない訳ではなく、信頼を置ける友人と言う意味ではかなり人気があるのだが、それ止まりで恋愛にまで発展することが殆ど無いのだ。それを本人も気にしていて、イルルからプロンテラ協会に綺麗な新人と可愛い新人が入ったよと言う情報を貰ったからというもの、会いたくて会いたくしようがなかったのである。

「うん…でもほら、やっぱりギルドマスターが一部の人だけ特別扱いするのって、なんとなく他の人に申し訳が立たなくなっちゃう事ってあるじゃん？」

急に声のトーンと雰囲気は暗くなり、リヴェンティはヤバイ…とちよっと気まずそうな顔をした所に今度はシルビアがフォローを入れ

た。

「大丈夫ですよりよーんさん。りよーんさんみたいな素敵な方にはきつと素敵な恋人が出来ます。私でよかったら何時でも相談に乗りますから何時でもプロンテラ協会にいらしてください」

手を取り、女神のような微笑みを見せながらまっすぐにりよーんを見つめた。

「は…はい…」

その後、カフェを出た所でりよーんと別れる事になった。

「じゃありよーん、カードの事頼んだぞ」

「ああ！任せておいてくれ！売れたら直ぐに連絡するよ！後武器が壊れたら直ぐに言ってくれ！僕が直ぐに直してあげるよ！！」

「りよーんさん、ごちそうさまでした」

最後にシルビアがお辞儀をする。

「いえいえ、また今度一緒にお茶しましょう」

そう言つてりよーんは自分のギルドの溜まり場へ向かっていった。

「ただいま」

3人がプロンテラ協会へ帰って来ると、グランが待っていた。

「シルビアさん、リヴェンティさん」

真剣な声で名前を呼ばれ、思わず2人は身構えた。

「グランさん、何かあったんですか？」

「何か私達の事で問題でも……？」

2人は緊張しながらグランを次の言葉を待った。

「いかがわしい事はされなかったかい!？」

「……」

「もう、2人が本当は何をしているのか気になって気になってしょうがなかったんだよ？イルルの事だから本当に！何をするか分かった物じゃないからね……」

3人はまだその事を気にしてたのか、と言わんばかりに呆れていた。

「大丈夫ですよ。本当にカフェでお茶を飲んでいただけです。」

「イルルさん以外にも男の人が居たけどね？」

リヴェンティの言葉を聞いたとき、グランの表情が変わりイルルの方を向いた。

「おい、どういうことだ…？話が違っじゃないか……」

青筋を立てながらグランがイルルに詰め寄って行く。

「ま…まで、知り合いの奴が2人にどうしても会いたいって言うから…？いや、落ち着けて…、会わせないとソードガーディアンカード売らないって駄々をこねたんだよ…！！ほんとに…！！いやマジで…！！」

「ふむ…ではもう一度問おう、神を信じるか？」

「あ…ああ…信じる者は救われる…」

イルルは両手を合わせ、神へ祈りをささげた。

「そうか…じゃあ天国へ逝ける事を信じるんだな…！！」

グランが聖書を振り上げる。

「いや！？ちよつとまで…！！その角何か付いてる…！！金属的な何かが付いてる…！！」

「…アーメン」

グランがイルルに聖書振り下ろそうとした直後

バン！！

と勢い良く協会の扉が開いた。その場に居た全員が扉に目を向ける。

「はあ…はあ…シルビアさん！！早速恋愛相談に来ました！！」

そこに立っていたのは、先ほど別れたはずのりょーんだった。その顔は汗を流しながらも笑顔で輝いていた。

「まあ…では此方にいらして下さい。今お茶をご用意いたしますね」

シルビアはりょーんの案内とお茶を用意しに奥へ行った。

「幾らなんでも早すぎだろうっ」

「幾らなんでも早すぎでしょ…」

イルルとリヴェンティの言葉がハモリ、グランは何が起きたのか理解できずその場で固まっていた。

第6話・いかがわしいとはとんでもない！（後書き）

如何だったでしょうか、次回からはちょっとオリジナル要素でもまぜていこうかと思っています。

第7話：あれ？今回オチが無いよ？（前書き）

えー、なんだかんだ言いながら今回は続いているようです。

しかし、こつやつてやる気を持続させないとまた何時、無期限休止！となるかもしれないので、モチベを頑張って保とうと思います。

第7話：あれ？今回オチが無いよ？

「いやー、やっぱり狩りの後の飯は格別にうまいなあ！」

「まあ、今日はレアアイテムも出たし、少しくらいは豪勢にしても問題は無いしな」

「シルビア！これ美味しいよ！すっごくオススメ！」

「あら…本当ですね、この食材は苦味が強いのに、全然苦くないです。調理した人はとても上手な方ですね」

恒例になりつつある、4人での食事風景、最初の実戦以降これといったミスも無く、実戦というよりは狩りと言う言葉が相応しくなってきた辺りグランはもうそろそろ狩場の難易度を上げてみよう考えていた。

「なあイルル、そろそろ狩場のバリエーションを増やしても良いと思うんだが、どう思う？」

「んー、確かに2人とも今の狩場じゃ役不足って感じがするしな…だが、そうなつてくると俺1人じゃ殲滅が足りなくなってくるぞ？後衛職が1人位は居ないとこれ以上の所は行けないだろう、誰か宛てでもあるか？」

言われて、グランは自分の知り合い関係を思い返してみた。プロンテラ協会関係の知り合いの中には少なからず居るが、イルルのようにしょっちゅう付き合ってくれる人は居ない、頼めば付き合っ

貰えるだろうが、それ相応の報酬を用意する必要があるだろう。イルルは飯さえ食わせておけば基本的に何でも引き受けてくれる。簡単な奴……おっと違うな、友達思いと言う事にしておこう。

「あれ〜？ひよつとしてるんじゃない〜？」

後衛について色々考えている時、不意に知らない名前を聞いた、正しくは知っているような気もする名前だがやはり知らない名前だった。

「俺の事をこの名前で呼ぶ奴はプロンテラひろしと言えど1人しか居ない……！」

なんだ、イルルの知り合いか、それにしてもいるんか……あいつも可愛いニツクネームをで呼ばれることもあるんだな……

「わーい！やっぱりいるんだ〜！！！」

「あ……でも丁度良いや、蓮華ちよつと付き合っつて欲しいんだが」

「え！？いるんから愛の告白……！？いや……でも……私にも心の準備つて物が……」

なにラブコメ始めてるんだ？と初めて蓮華と呼ばれた人物に顔を向けると、背中に大きい弓を背負っていた。ハンターと呼ばれる職業である。

ハンターとは後衛職の一つで、弓や罠を用いて敵を殲滅する職業である。矢と罠にもそれぞれ属性や種類があり、殲滅だけではなく状

態異常等のサポートも出来る。ある程度の狩場に行く時は前衛、後衛、支援が揃ってないと行けなくなる。火力が前衛<後衛なのだ、後衛も防御力は高くなく、前衛が敵を引き付け、後衛が殲滅をする、それにプリーストが支援を行う。これが基本的なパーティプレイである。今までは支援3人に前衛兼殲滅1人だった為、余りバランスが良いとは言えず、低級狩場しか行く事が出来なかったのだ。

「俺の友人がプリーストの新人担当になってな、今までより難易度の高い狩場に行きたいんだが、後衛が居ないんだ。りょーんの所から借りてきても良いんだが、あそこは毎回同じ人って訳にも行かないからな、まあ蓮華次第なんだけどな？」

「なんだ…そう言うことね…：…んー、私で良ければ付き合うよ、最近ハズレ臨時ばかり引いて疲れちゃったところだし…」

「よし、じゃあ狩場は蓮華に決めてもらって、明日行こうか、何処が良い？」

「んーそうだねーグラストヘイムの騎士団なんてどう？最近ちょっと噂されてる魔物も居るし」

「噂されてる魔物？」

グラストヘイムの騎士団は中級〜上級の間位の場所である。魔物のほかに亡霊の類なんかが出たりするが、その分見返りは大きい。だが、噂をされるほどの魔物が出るというのはプロンテラ協会にはまだ上がってきていない。

「うん、凄くでかい鎧を着た奴がうろついでるって噂、レイドリッ

クとは比べ物にならないみたい。何人が被害にあったパーティも居るみたいだよ？」

その噂は最近になり出没するようになってきたらしく、まだ協会の方まで報告が行ってない様だった。

「まあ、いるんが足止めしてくれれば、私がサクッと倒しちゃうよ〜」

「ん〜狩場的には丁度良いとは思ってたが、噂の魔物も気になるな…新人とは言い切れなくなったが、シルビアさんとリヴェンティさんが噂の魔物に対応できるかどうかがちよっと心配だ…」

「グランさん！」

いきなりシルビアが立ち上がりグランの方を向いた。シルビアの予想外の行動にグランは少し驚いた。

「私達は、これまで決して多くとは言えませんが実戦訓練を積んできました。そして、協会に報告されていないのに、被害が出ている現状、それを知って黙って見過ごすわけには行かないと思います。決して足手まといにはなりませんから、連れて行ってください」

確かに、協会に報告が無いとはいえ、実際に被害が出ている現状、今から報告するとはいえ、放って置くのは確かに危険かもしれない。そして、偶然にも前衛、後衛、支援が揃っている。行ってみる価値は充分あるだろう。

「分かった。協会には俺から報告しておこう。明日グラストヘイムの騎士団に行こう。目的は噂になっているモンスターの討伐だ。明

日は厳しくなる事が予想できるから、各自しっかり休息を取って置くように」

そして、グラン達はグラストヘイムの騎士団へ向かうのだった。

第7話：あれ？今回オチが無いよ？（後書き）

はい、次からちょっとファンタジーっぽいというのか、オリジナル要素追加します。しかし、俺TUEEEEE的になってしまう可能性が高く、その辺は暖かく見守ってもらえれば幸いです。

第7話：俺TUEEEEE…？（前書き）

えー、今回に限っては新しい演出の試みとしまして俺TUEEEEE
を組み込みました。正直難しいです。俺には合っていない気がします

…

第7話：俺TUEEEEE…？

こうして5人はグラストヘイム騎士団へ噂の魔物討伐にやってきた。

「今までとは違った邪悪な気配がしますね…」

「うん…なんか嫌な感じがする…」

「ここは魔物だけではなく怨霊の類も多く出現するからね。侵入者に対する敵意が嫌な感じに感じるんだよ」

一番簡単な表現をすると朽ち果てた城というのが妥当だろう。昔は煌びやかだったのだから今では、床はひび割れ、瓦礫が転がり、壁には至る所に穴が開いている。壁一面に掛けられた国旗もズタズタに引き裂かれている。だが城の造りは頑丈で崩壊を感じさせる事は無かった。

「でも、蓮華、ここに来ていきなりイメチェンか？」

「うん、最近ちょっと伸びてきちゃったかなあって思ってたんだ、でも切ってる余裕は無くてね…」

昨日の蓮華は栗色の髪を腰辺りまでストレートに伸ばしていたが、今はシニヨンキャップで纏めていた。前髪は自分で切ったのか、中華っぽいイメージを醸し出していた。

「いや〜しかし久しぶりだな、グラン、昔は良くここに来たなあ…
エルとかカード取りに…」

「ああ、昔からお前は俺を置き去りにして、1人で突っ込んで行ったな…戻ってくるなり、ヒールくれ、支援よこせ…ああ、懐かしい……」

グランの思い出したくない過去が顔の表情に出ていた。昔から苦労していたんだなあ…とシルビアとリヴェンティは思っていた。

「でも、ここが狩れるようになると大分違ってくるから、2人ともがんばってね」

蓮華の何気ない一言で早く一人前になりたい2人のモチベーションは上がるのだった。暫く進むとガシャガシャ音を立てながら剣を持った鎧が何体か襲い掛かってきた。

「っと、早速お出ましたな！ガシャガシャ！」

せめてレイドリックと言う名前呼んでやれ、2人が勘違いするだろう…と思いつながらグランは支援を始めていく。

「ダブルストレイフィングー!!」

後方から矢が勢い良く飛んで行き、レイドリックの空洞になっている顔部分に突き刺さった、レイドリックの兜がそのまま吹っ飛んで行き体ごと消滅する。

「おー…、また腕を上げたな？蓮華？」

「ふふん、ハンター（狩人）とは常に成長し続ける物なのだよ？」

負けじとイルルも大剣で豪快にレイドリックを吹っ飛ばしていく。

「ボウリングバアアツシュ！！」

ボウリングバツシュとは一匹の敵を弾代わりにして飛ばし複数の敵に当て敵を巻き込んで倒すナイトの代表的スキルの一つだ。

「いるるんは相変わらず豪快だねえ〜」

2人は、笑いながら、愉快に敵を倒している。シルビアとリヴェンティは自分達の来た意味はあるのだろうか？と思いつつも支援をこなして行く。前衛と後衛の支援は若干勝手が違う為、新人の2人は交代しながら前衛と後衛の支援を覚えてもらい、グランはそのカバ―をする役割となった。そして、狩りは順調に進んでいった。

「最初は不安だった所もあったけど、結構良い感じになってきたね？」

少し休憩をしている間に、蓮華が2人の支援の腕が確実に上がっている事を褒めていた。2人は嬉しそうに蓮華の話聞いていた。しかし、イルルとグランは別の事を話してた。

「ところで、噂の魔物ってどんな奴なんだ？」

「ああ、俺が仕入れた情報によると、色は紫、赤、図体は相当でかいって事しか入ってきてないな……」

「レイドリックと見間違えたって事は無いのか？」

「それだったら、あいつはそこまででかくない、それに顔に炎が灯っていたって情報もあった」

「ふむ…まあどちらにせよ倒しておかないとな……」

「そうだな…まあとりあえず狩りを続けてれば遭遇するだろう」

そして、「ソイツ」は突然現れた。

「!?!」

気配に気が付いた時にはもう敵はこちらに攻撃を仕掛けていた。

「逃げる！」

強力な魔力反応を感知したグランはそう叫んだ。

敵が放ってきた魔法は「メテオストーム」指定した範囲に多数の隕石を召喚し相手に叩き落とすウィザードの大魔法である。敵が指定した範囲はグラン達が休憩をしていた真ん中であり、グランとシルビアはテレポートでその場を離れ、蓮華は持参した八工の羽（テレポートと同じ役割を果たす）を使いその場を離脱した。強力な範囲魔法を使う敵が現れた場合、逃げ切れないと判断した場合は、各自で

魔法の範囲から抜け出し、後で合流をするという事を最初の打ち合わせで決めていたのだ。

「きゃああああ!!!」

だが、突然の出来事に反応し切れなかったリヴェンティにメテオストーンが襲い掛かる。

「ちい!!!」

舌打ちをしながらもリヴェンティに向かって走り、イルルはメテオストーンからリヴェンティを庇った。だが、庇い続けている間も隕石が効果範囲に降り注ぐ。そして、メテオストーンが終わると、そこには、ボロボロになったイルルとリヴェンティが床に倒れていた。リヴェンティはイルルに守られていたとはいえ、協会から配布された礼装は大部分が燃え尽き、砕けた石などに全身を殴打され、動く事が出来ず、イルルは隕石の直撃を喰らい、装備が吹き飛び、鎧や盾だった物はその辺に散らばっていた。2人とも意識はあったが、とてもその場から動ける状態ではなかった。

「う……ああ……痛……い……」

全身に火傷を負い、痛みで呻き声をあげるリヴェンティ、その隣には仰向けの状態で倒れているイルルが居た。自分が足手まといになり、彼をこんな酷い状態してしまった。悔しくて、悲しくて涙が出た。

ガチャ……ガチャ……

そして、自分に死を与える足音が迫ってくる。そこで初めて敵を見る。紫の装甲におびただしい量の血が付いている。兜の目の部分には炎が灯り、禍々しい剣と何かの顔を模した盾を持った、死神が一步ずつこちらに向かって来ていた。このままでは間違いなく2人も死んでしまう。どうにかしなければと考えながら、生き残りたいと強く願った。

「生きたいか…？」

突然、隣で仰向けになっているイルルが言った。

「え…？」

イルルが生きている事に少し安心したが、お互い全く動けないので状況は何も変わらない。しかし自分のせいでこのような事態になってしまった事を謝る時間が出来た。この時間を無駄にしたくなかった。とにかく謝らないといけない。全身火傷でリヴェンティは思考が混乱していた。

「ごめん…なさい…うちのせいで…こんな事に…」

「そんな事は聞いてない…生き残りたいかと…聞いてるんだ…」

こんな絶望的な状況でどうやって生き残るといふのだろうか、無理に決まっている。奇跡的にグランさん達が駆けつけてくれたとしても、こんな化け物を自分達を庇いながら倒せるわけが無い……

「むりに…決まってる…できるわけ…」

「俺だって…こんな所で死にたくねえ…お前が…これから起こる事を一切…他言しないと誓うのなら…賭けに出ても良い…だが…ばれると…非常にまずい……ばれる位なら……死んだ方がいい……どうする…？」

死の音は一步ずつ近づいてきている。もう時間は無い。生きてここから帰れるのなら、なんだったとする。生きたい…生きたい…！生きたい！！生への執着心がリヴェンティの心を動かした。

「誓います……だから…助けて……」

「約束…守れよ…！」

その瞬間、リヴェンティはあり得ない物を見た。イルルの体から魔力が溢れている。イルルはナイトだ。魔力が全く無いわけではないが、今イルルの体から溢れている魔力は尋常ではない、プリーストであるリヴェンティやシルビアよりも遥かに強力な魔力だった。

「はあ……はあ……ブラッディ……ナイトか…」

イルルはよろよろと立ち上がりブラッディナイトを睨んでいた。だがその目は何時ものイルルの目の色では無く金色に染まっていた。リヴェンティはなぜかその瞳に戦慄を覚えた。

ズドン！

凄まじい衝撃が起き、ブラッディナイトは後方の壁に叩きつけられていた。魔法を唱えたわけではない、魔力その物を相手にぶつけたのだ。そして、イルルは落ちていた剣を拾いブラッディナイトに突っ込んでいった。

「あああああああ…！！！」

全身に重度の火傷を負った状態では長い時間の戦闘は不可能、一気に間合いを詰めて勝負を決めに行ったが、ブラッディナイトは既に迎撃体制を取っており、イルルに向かって剣を振り下ろした。リヴェンティの目にはブラッディナイトの剣がイルルに吸い込まれて行くように見えた。

ザシユ…！！

ブラッディナイトの剣でイルルが見えなくなった時、ブラッディナイトから剣が落ちた、ブラッディナイトが剣を振り下ろすよりも早くイルルがブラッディナイトの腕を切り落としたのだ。

「ゲオオオ！！？」

ブラッディナイトは驚きながらも、盾でイルルを押し潰そうとしたが、その時には既にブラッディナイトから盾は切り離されていた。

とても重症とは思えない動き、火事場の馬鹿力とも思える凄まじい動きだった。そして剣を腹部に突き刺して床に叩き付けた。

「グガガガ…ガガ…」

両腕が切断され立ち上がれないブラッディナイトと一旦距離を取った。最後の一撃を放つ為に…

「さあ……こいつで終わりだああ!!」

イルルが魔力をブラッディナイトの頭上に集約されていく、ブラッディナイトはその魔力から逃げるようとするが、それよりも早くイルルの魔法が完成した。

「ロオオドオブ……ヴァアアアミリオン!!」

ロードオブヴァーミリオン、自分の任意の場所に連続して雷を落とすウィザードの大魔法の一つである。だが、本来ナイトであるはずのイルルが使えるわけが無い、一体どうなっているのだろうか、自分の目の前で起きていることをリヴェンティは全く理解できなかった。まるで夢でも見ているような感じがした。夢なら良いとおもった。夢なら覚めればまた皆と一緒に楽しく過ごせるのに……リヴェンティの目から涙が零れそれと同時に意識を失った。

「ガアアアアアアア……………」

ロードオブヴァーミリオンの雷の中でブラッディナイトは消滅した。

「は……………は……………」

ブラッディナイトを倒したイルルは腕をだらりと下げ、目は元の色に戻り、剣を握ったまま、疲労困憊の表情でその場に倒れた。それから暫くして、グラン達がイルルとリヴェンティを発見し急いで、教会へ運んだのであった。

昔の夢を見ていた、まだ俺に家族が居た頃の夢、父さん、母さん、それに妹が1人居た。あの頃はまだ目標に向かって一直線に進んでいた。俺があんな事に憧れなければ、この家族をずっと失わずに済んだのかもしれない……………だが、過去は戻せない、ああ…出来る頃ならあの頃に戻りたい……………

「ん……………？」

目を覚ました時、俺は全身に激痛を感じた。どうやら”雷帝”の反

動だけではなく、その直前に受けたメテオストームのダメージもかなり大きかったようだ。だが、何とか今回も生き残る事が出来た。「あの時」も、生き残る事が出来た。どうやら運は良いらしい……暫くすると腐れ縁の親友が入ってきた。

「お、やっと目が覚めたか、お前かなり危なかったんだぞ？ブラッディナイトはどうなったんだ？」

「おいおい……さっき目覚めた所で、その質問攻めはねーよ……グラン……こっちは死ぬ気だったんだぜ？奴は片付けたよ、戦利品落ちてただろう？」

「いや？何も落ちて無かったぞ？見間違いじゃ無いのか？」

いや、そんな事は無い、あの時、大剣が一本落ちてたのを俺は意識が途切れる前に確認している。つまり、俺が倒した後に誰かが持っていたと言う事になる。この戦利品はどうでも良い、問題は”雷帝”を見られたかどうかだ。見られていなければ問題は無い、だが見られていた場合、目撃者の口封じをしなければならない。「あの時」以降数回しか使っていないが、町の酒場で噂になっていない所を見るとばれてはいない。だが今回は確実に1人以上は見られた。1人は信頼が置けるがもし、2人以上居た場合、厄介な問題になりそうだ……

「なあ、俺どれ位寝てたんだ？」

「5日だ。リヴェンティさんは3日で起きたけど、全身に火傷を負ってるから入院中、まあそれはお前も一緒だけだな」

「新しい噂とか聞いてないか？」

「噂？お前を運んでから部屋の手配とか色々大変だったんだぞ？酒場に行ってる暇なんかあるわけ無いだろう？」

「ふむ…それにしても安っぽい部屋だな…もうちょっと良い部屋にしてくれよ」

「はあ？冗談は休み休み言えよ…？あ、それと入院費用はソードガ―ディアンカードの取り分から引いておくからな？」

「え……ちょっと待って！そりゃあねえだろう？こっちは命賭けてプロンテラ協会の大事な大事な新人を助けたんだぜ？そこはサービ―スしてくれよ…？」

「なるほど…確かにそれは一理あるな、分かった入院費用はサービ―スしてやる。その代わり今まで飯を奢ってきた分を返してもらおう」

「おいおい！それもちょっと違うんじゃないか？っておい！ちょっと待ちやがれ…！」

「悪いな、こっに見えて忙しいんだ」

グランはスタスタと部屋を出て行った。

「今まで奢ってもらってき飯の合計金額……今回の俺の取り分無いんじゃない…？そりゃねえぜ…グラン…」

落ち込んでいる所にまた客人がやって来たようだ。

「やつほーいるるーん目覚めたって聞いたよ」

「一時は本当に危険な状態だったんですよ？イルルさん……」

蓮華とシルビアだった。あと後ろにりょーんの姿が見えた。

「まあ……心配かけて悪かったな……だがこの通り、全身まだすつごく痛いです……」

「まあまあ、イルさんはゆっくり休んだ方が良いよ、はいこれ差し入れだよ。後、ソードガーディアンカード売れたからお金渡しておくね」

「お、悪いな……後で皆で分けるわ……（ラッキー グランに飯代払わずに済む）」

「シルビアとリヴェンティの分は一緒にグランに渡しておくな」

「はい、次にグランさんとお会いした時にお願いします」

うん、りょーん中々のグツジョブだ。

「あ、りょーん、ちょっと頼みたい事があるんだけど」

「ん？何？」

「鎧と盾が無くなったから適当に見繕っておいて、金はその時に払うわ」

「あーい、毎度〜出来たら連絡するね〜じゃあお大事に〜」

そう言いながらりょーんは部屋を出て行った。

「あ…腹減ったけどこの状態じゃりょーんの差し入れ食べれないじゃないか…」

5日間何も食べてない状態で目の前に差し入れが置かれたら普通食べなくなるだろう。

「じゃあ、私が食べさせて差し上げますよ？」

「え？良いの？助かるわ〜」

そう言ってシルビアは果物を切ってイルルに食べさせるのだった。

「はい、あ〜ん」

シルビアがフォークに果物を刺しながらあ〜んをする。

「あ、そうそうイルさん言い忘れてたんだけど……え……？」

そして、果物を口に含んだ瞬間にりょーんがまた入ってきた。

「ん？りょうひた？ひょーん？（ん？どうした？りょーん？）」

「え…今、あ〜んしてたよね…？してたよね…！？」

コクリ

「……うわーん！！僕だってまだしてもらった事無いのに……」

りょーんは用件も忘れて、その場から去っていった。

「うーん……なんか悪い事した気分だ……」

「……?」

そう言いながらも、りょーんの差し入れを全部シルビアにあぐんで食べさせてもらったイルルであった。

第7話：俺TUEEEEE…？（後書き）

”雷帝”とは一体何なのか！？待て次回！！

そして、りょーん…すまん（・・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7476i/>

グランと愉快的な仲間達

2011年10月6日04時45分発行